

日语路路通系列丛书

新日本语概论

蔡全胜 ◆ 编著



黑龙江人民出版社

日语路路通系列丛书

新日本语概论

蔡全胜 编著

黑龙江人民出版社

图书在版编目(CIP)数据

新日本语概论/蔡全胜编著. - 哈尔滨:黑龙江人民出版社,2006

ISBN 7 - 207 - 06936 - 7

I. 新... II. 蔡... III. 日语 - 概论 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 033632 号

责任编辑:安晓峰

装帧设计:殷庆年

新日本语概论
蔡全胜 编著

出版者 黑龙江人民出版社
通讯地址 哈尔滨市南岗区宣庆小区 1 号楼
邮 编 150008
网 址 www.longpress.com E-mail: hljrmcbs@yeah.net
印 刷 大连华能印刷厂
开 本 850 × 1168 毫米 1/32 · 印张 10.6
字 数 200 千
印 数 1 - 3000
版 次 2006 年 5 月第 1 版 2006 年 5 月第 1 次印刷
书 号 ISBN7 - 207 - 06936 - 7/H · 239

定 价:19.80 元

前 言

本书是为了介绍现代日语语言理论及现代日语研究现状,为我国日语学习者提供一个学习、研究的平台而撰写的。

以往我国的日语语言教学与研究多采用日本的《国语学》原著为教材,侧重于所谓“学校文法”的传授与研究。随着我国日语教学的普及和深入,开设日语专业的学校越来越多,专业层次也越来越高。因此,对日语语言教学与研究也提出了新的要求。本书正是为了适应这一需求在收集、参考了大量有关日语语言研究资料的基础之上,对日语的语音、词汇、语法进行了全面的概述。其中不仅包括了《国语学》的历史研究成果,更有当今现代日语研究的新观点。

一段时间,日本学者极力强调在世界语言中的日语个性。近年来,出现了新的研究倾向。即,不是去过分地强调日语的个性而是去证明日语在世界语言中的普遍性。但是,日语表示授受关系的语言现象不容置疑有其独特之处。因此,本书力图客观、准确、通俗地揭开日语语言内在的秘密,对日语的个性和普遍性进行探索与研究。

本书不仅以大学本科生、研究生为对象,而且还面向立志学习与研究日语学的有志之士。期待着有更多的人关注我国的日语语言研究,更期盼着涌现出更多的精通日语语言的学生与学者。

本书在编写过程中得到了我国日语界同行的鼓励与支持,同时还得到了日本学者的指导与帮助在此一并表示衷心的感谢。在此还要感谢出版社的支持。

2006年5月

目次

第1章 日本語の音韻	1
第1節 音声と音韻	1
1 言語音と音声器官	1
2 音声と音声学	2
3 音韻と音韻論	9
4 音節とモーラ(拍)	11
5 清音と濁音と拗音	13
6 アクセント	15
7 イントネーション	19
8 プロミネンス	20
第2節 上代特殊仮名遣いといろは歌	22
1 上代特殊仮名遣い	22
2 いろは歌	23
3 五十音図	26
第3節 音韻の変遷と統合	29
1 サ行子音の変遷	29
2 ハ行子音の変遷	30
3 オとヲ、イとヰ、エとヱの混同	31
4 音便・拗音の成立	32
5 オ段長音の開合とその消滅	35
6 四つの仮名の混同	36
第2章 日本語の文字と表記	38
第1節 文字と表記の総論	38
1 文字とは	38

2	字形・字体・異体字・書体	38
3	文字の機能・文字体系	40
4	文字の表記法	43
第2節 ローマ字と表記		48
1	「へボン式」	49
2	「日本式」	49
3	「訓令式」	50
第3節 仮名と表記		51
1	平仮名	52
2	片仮名	55
第4節 仮名遣い		58
1	仮名遣いの起源	58
2	定家仮名遣い	59
3	契沖の名遣い研究	61
4	現代仮名遣い	63
5	送り仮名	65
第5節 漢字と表記		69
1	漢字の字音	69
2	漢字の字訓	70
3	湯桶読みと重箱読み	71
4	字体	74
第6節 外来語		76
1	外来語の表記	76
2	外来語の表記の例	77

第7節	記号と数字	78
1	くぎり符号	79
2	くり返し符号	82
3	数字の表記	82
第3章	日本語の語彙・意味	87
第1節	語彙	87
1	語彙	87
2	見出し語	88
3	語彙量	89
4	基本語彙	90
5	基礎語彙	90
6	表現語彙	91
7	理解語彙	91
第2節	語義と語構成	92
1	語義	92
2	類義語・対義語	92
3	語源・語史	93
4	語構成	93
5	造語法	94
第3節	意味分野・語種・位相	100
1	意味分野	100
2	語種	100
3	位相	102
第4節	語彙体系の記述	103
1	上位語・下位語	103
2	語彙史	105

第5節 辞書	106
第4章 日本語の文法	108
第1節 序説	108
1 文法と文法論	108
2 文法研究の単位	110
3 文節論による文の構造	112
4 文の構成要素	119
第2節 文の構造と種類	121
1 入子型構造	121
2 述語句の構造	129
3 文の階層的構造	137
4 文の種類	143
第3節 格	149
1 格とは	149
2 表層格と深層格	154
3 格枠組みの機能	159
4 格を考える上での留意点	161
第4節 連用修飾	165
1 連用修飾とは	165
2 連用修飾の基本的なパタン	167
3 従属節による連用修飾	171
4 連用修飾と連体修飾	173
第5節 連体修飾	175
1 連体修飾とは	175
2 連体修飾と連用修飾	176
3 連体修飾節	178

4	名詞節	186
第6節	活用	189
1	「活用」とは	189
2	現代語の動詞活用表	190
3	「語幹」と「活用語尾」	191
4	動詞の連用形	192
5	学校文法の活用表の問題点	195
第7節	ヴォイス	200
1	「ヴォイス」(「態」)とは	200
2	受動態	202
3	使役態	211
4	可能態	217
5	「ら抜き言葉」について	218
6	受動態・使役態と授受表現	221
第8節	テンス	226
1	テンスとは	226
2	主節の中のタ形とル形	227
3	従属節の中のタ形とル形	230
第9節	アスペクト	234
1	アスペクトとは	234
2	「テイル」の意味	234
3	アスペクトとテンスの関係	237
第10節	モダリティ	241
1	モダリティとは	241
2	対事的モダリティ	242
3	対人的モダリティ	245

第11節 「のだ」	249
1 疑問文と否定文における「のだ」	249
2 関連づけの「のだ」	257
3 認識のあり方に関わる「のだ」	261
第12節 「は」・主題・とりたて	264
1 主題と「は」	264
2 「は」の対比用法	266
3 とりたてを行う助詞	269
4 「は」の係助詞性	271
5 情報伝達と「は」	273
第5章 談話とテキスト	279
第1節 談話の分析	280
1 談話のルール	280
2 言い淀み	281
3 相づち(聞き取り表示)	281
4 応答	282
第2節 テキストの分析	283
1 テキストの結束性	283
2 談話と接続詞	284
3 指示語	286
第3節 コミュニケーションと言葉	294
1 言語行為論	294
2 「言葉の奥にある真意」	294
第6章 日本語の文体	297
第7章 書き言葉・話し言葉	299
第8章 敬語	301

第1節	敬語の分類	301
1	尊敬語	301
2	謙讓語	305
3	丁寧語	307
4	美化語	310
5	敬語と人称	311
6	敬語の機能	313
第2節	敬語の誤用	316
第9章	日本語の特色	318
第1節	日本語と「国語」	318
第2節	公用語	320
第3節	世界の中の日本語	320
1	孤立語	321
2	屈折語	321
3	膠着語	322
4	抱合語	322
第4節	日本語の系統	323
第5節	日本語の特色	323

第1章 日本語の音韻

第1節 音声と音韻

人間の日常の言語生活を「話し、聞くこと」と「書き、読むこと」に大きく分けられる。しかし、私たちの言語生活において、最も基本的な部分は、むしろ前者であると言えよう。例えば、私たち中国人は幸いにして古くから文字を獲得し、使用してきたが、一方で、何千とある世界の言語のうち、文字を持たない言語（無文字言語）も数多く存在する。また、各地で使用される方言が、文字に記録されることは、極めてまれなことである。すなわち、私たちの生活語は話し言葉であって、書き言葉ではないのである。言葉にとっては、文法・語彙も必要不可欠な要素ではあるが、それらを支える最も基本的な要素が音声である。私たちが、「書き、読む」時に用いるのが「文字」であるのに対し、「話し、聞く」時に用いるのが「音声」である。

1 言語音と音声器官

人間はさまざまなオトを出すことができる。例えば、手を叩くオトであったり、足踏みをするオトであったり、舌打ちをするオトであったり、泣き声であったり、おしゃべりであったりする。しかし、これらのオトは、口、喉、舌などのいわゆる音声器官を使う音と、音声器官以外の手足などを使うオトとに分類される。このように人が思想内容を伝達するために音声器官を使って出されるオトを一般に「音声」または「言語音」と呼んでいる。

この「音声」は言語研究の対象とされる。一方、音声器官を使って出されるオトの中でも、叫び、泣き声、いびき、あくびなどの音は、反射音などと呼ばれ、言語音から除外される。

2 音声と音声学

「音声」を研究の対象とする分野を「音声学」と呼び、そこで扱われる音声は〔 〕を用いて、例えば[k]のように表わされる。〔 〕の中に表わされたアルファベットは音声を表わす記号、すなわち**音声記号**である。それは/ /を用いて表わす音韻記号(後述)とは区別される。世界の言語にはさまざまな音声を観察されるが、そうした種々の音声を表記する場合の共通理解の一助として、現在では、I. P. Aと略称される「国際音声字母 International Phonetic Alphabet」が広く用いられている。

音声学には、肺臓からの呼気が気管を通り、喉頭、口腔、鼻腔等の音声器官を通過する際、どのように変容して言語音としての特徴を持つに至るかを研究する**調音音声学**(articulatory phonetics)と、言語音の物理的、音響的特徴をさまざまな音声分析機器により研究する**音響音声学**(acoustic phonetics)と、音声聞き手に知覚され、認知されるために聞き手の知覚処理機構でどのような処理がなされるかを研究する**聴覚音声学**(auditory phonetics)の3分野がある。

〈音声器官〉

音声を発するのに必要な器官を総称して**音声器官**と呼ぶ。図1が音声器官として使われる声道(喉頭より上の部分)断面図である。これらの音声器官が働いて個々の音が発せられることを調音という。声道を通過する流気は呼気であり、吸気は使用されることはほとんどないと言ってよい。呼気は肺を出て気管を上昇し、咽頭に達する。咽頭の内部には声帯がある。左右の声

帯の間を声門、声門から上の調音器官を声道という。

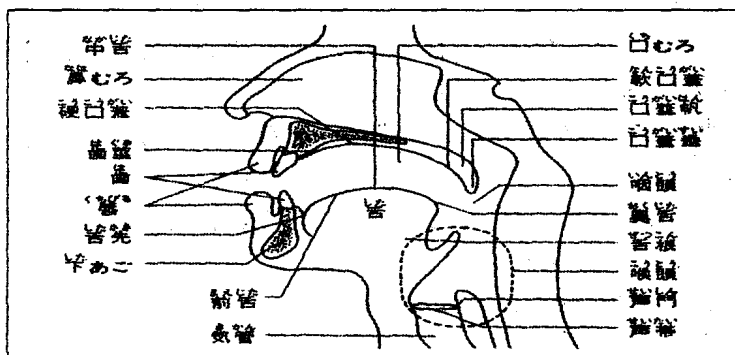


図1

〈単音〉

言語行動として発話された音声は実際には個々の人の個々の音声器官の特徴や発話の状況により、さまざまな音色によって実現されている。無数に等しい発話音声の中からどのようにして個々の音声を取り出すことができるか。音声学では単音 (phone) と呼ばれる最小の音声学上の単位を用意して、個々の音声の音色や音声体系の説明を容易にしている。

単音は「調音器官が一定の位置を取っているか一定の運動を繰り返している瞬間に生ずるオト」と定義される。(服部四郎『音声学』40頁)例えば、ネコ(猫)[neko]という単語の音を構成する[n][e][k][o]はそれぞれ音声学上の最小単位である単音ということになる。単音は母音と子音に大別される。また、単音には喉頭にある声帯の振動によって生じる声を伴う音と、それを伴わない音とがある。それらを区別して、声を伴う音を有声音、伴わない音を無声音という。喉仏の下の辺りに指先を当てると、声が出ている場合には、かすかにぴりぴりとした振動が感じられよう。ささやいている状態では、声が出ていないこと

もそれによって確かめられる。

〈母音〉

単音は、それが発音される際に、口腔で障害が形成されるかどうかで、母音と子音に分類される。

母音は呼気がほとんど何の妨げもなく発せられる単音である。母音は「舌の上下の位置(口の開き方)」、「舌の前後の位置」、「唇の丸めの有無」という三つの要素によって次のように分類、特徴付けられる。

○舌の上下の位置による分類

^{せま}狭母音(舌の位置高、口の開き小)

^{ひろ}広母音(舌の位置低、口の開き大)

両者の中間に位置する中母音(さらに半狭母音・半広母音に分けられることがある)もある。

○舌の前後の位置による分類

^{まえじた}前舌母音(前舌面が硬口蓋に近づく)

^{なかじた}中舌母音(中舌面が硬口蓋後部または軟口蓋前後部に近づく)

^{うしろじた}後舌母音(奥舌母音)(後舌面が軟口蓋に近づく)

○唇の丸めによる分類

^{えんしん}円唇母音(唇が丸められる)

^{ひえんしん}非円唇母音(唇は丸められない)

個々の母音の音色に関して、具体的にそれが調音される箇所(調音点)を記述することは、子音の場合と違って難しい。そこで、母音の記述を容易にするものとして、イギリスの音声学者であり、音声教育家であったダニエル・ジョーンズ(Daniel Jones)が人為的に設定した8箇の「基本母音」(Cardinal Vowels)が用い

られている。

日本語には「アイウエオ」の五つの母音がある。「アイウエオ」は、それぞれに口の開きが異なり、口の開きでは、「ア」が最も広く、「ア・オ・エ・ウ・イ」の順に狭くなる。また、発音する際に口蓋に向かって持ち上がる舌の位置も母音ごとに異なり、「イ」の位置は最も前寄りになり、「イ・エ・ア・ウ・オ」の順に後ろ寄りになる。母音は音節の核になるものであり、母音のない音節は存在しない。その他の音は子音である。いわゆる半母音も音節構成の上から、音韻論的には子音に分類される。

具体的にそれらの特徴とI. P. Aの簡略表記は次のようになる。

「ア」:「a」または「ɑ」。非円唇広母音。基本母音の「a」と「ɑ」の中間ぐらいの音である。

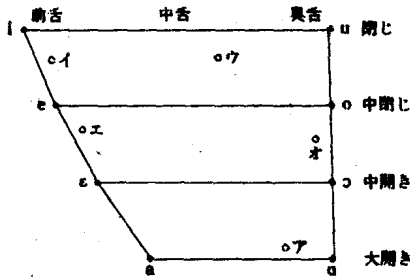
「イ」:「i」。非円唇前舌狭母音。基本母音の「i」に近い音である。

「ウ」:東京方言などでは「ɯ」。非円唇後舌狭母音。近畿方言などでは「u」であるが、基本母音「u」とは若干異なる。円唇後舌狭母音。両方とも簡略に「u」で表わすことがある。

「エ」:「e」。非円唇前舌中母音。基本母音「e」と「ɛ」の中間の音。

「オ」:「o」。円唇後舌中母音。基本母音「ɔ」と「o」の中間の音。

母音は基本的に有声音であるが、ある音環境においては無声になることがある。すなわち、無声子音には含まれた狭母音[i] [ɯ]などは、舌の構えはそのままであるが、声帯の振動を伴わないことがある。例えば「クシ(櫛)」[kɯʃi]、「キシャ(汽車)」[kɪʃa]、「～デス」[～desɯ]などの〔.〕印を付けた母音は無声化する。そのような現象を「母音の無声化」といい、無声化した母音を無声母音という。



第2図 基本母音と東京語の母音
 (『国語大学大辞典』による)

〈子音とその分類〉

子音は口腔のどこかで障害が形成されて発音される音である。子音はどこで調音されるか(調音点)、どのように調音されるか(調音法)、声帯の振動を伴うか(有声か否か)の3点を基準に分類される。

日本語の子音の調音点(Point of Articulation)には次のようなものがある。

^{りょうしんおん}
 両唇音:上下の唇によって調音される音。

^{し しけいおん}
 歯・歯茎音:歯茎硬口蓋と舌尖により調音される音。

^{こうこうがいおん}
 硬口蓋音:硬口蓋と中舌により調音される音。

^{なんこうがいおん}
 軟口蓋音:軟口蓋と奥舌により調音される音。

^{せいもんおん}
 声門音:左右の声門によって調音される音。

また、調音法(Manner of Articulation)による子音の分類は次のようになる。

^{はれつおん へいさ}
 破裂音(閉鎖音):いったん止めた息を一度に出すことによって出る音。入りわり、持続部、出わたりの部分に分かれ